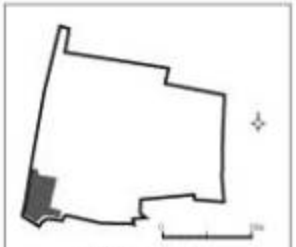
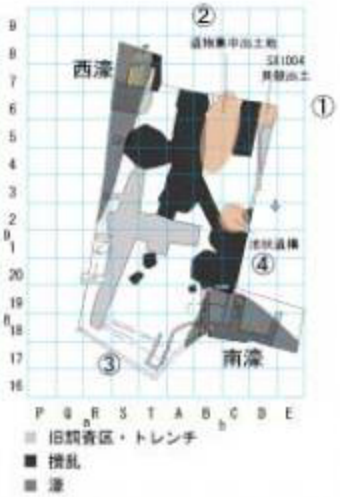
# 第13次館跡発掘調査現場説明会資料　'07.10.27



13次調査位置図

今年度の調査地は、勝瑞城館跡として公有化している南西隅にあたります。過去の調査において、会所跡と想定される礎石建物跡や枯山水式庭園が検出された場所が調査地の東側にあたり、曲輪を囲む濠および枯山水式庭園の西側への広がりや会所の付属施設等の確認に主眼をおき調査を行っています。




## 現在までの調査成果

①

調査地の北東で検出された遺構SX1004は、調査区内では5m×5m程度が確認できており、グライ化の激しい粘質の土が堆積していました。上面には石や瓦などの遺物がみられ、底部には、いくつかの小穴がみられます。この遺構の掘削時に下層から貝殻（アサリや蛤など）が厚さ10cm程度で広く堆積している古代の遺構が検出されました。共伴遺物から9世紀頃の遺構と思われ、赤色塗彩土器や土師器甕が出土しています。

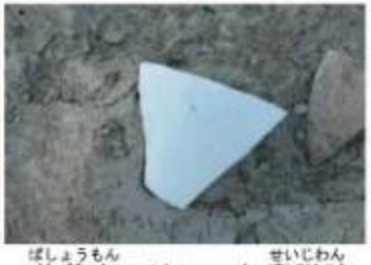
②

今年度の調査地で遺物の出土量が顕著に高かった場所。鉄製の釘が大量に出土したことから、何らかの建物が立っていた可能性が考えられます。ただ礎石とみられる石は確認できていません。

出土遺物としては、大量の釘、鉄製品、銅製品（六器・目貫・銭）、瀬戸美濃焼（天目茶碗・皿・鳥の餌入）、備前焼（擂鉢・皿）京都系の土師質土器小皿、輸入陶磁器（青磁・白磁・青花）、壁土などです。

出土遺物分布図

鳥の餌入（瀬戸美濃焼）



芭蕉文のはいった青磁碗

③

不定形な地割が残る区画で、現段階では顕著な遺構は東西方向に走る溝が検出された程度で遺物の出土量も多くありません。ただ西濠と南濠に挟まれ、南に不定形に広がりをみせる地割から、馬だし的な性格の場所の可能性は捨てきれず、今後の調査のポイントとなるものと考えられます。

④

池状遺構は過去の調査（現調査区の東側）で確認されているものの延長と考えられます。また枯山水式庭園に伴うものではないようです。枯山水式庭園は現調査区まで広がりはみられません。

池状遺構としてあるものの、水が永く溜まっていた形跡はみられず、盛土上に掘られた窪みと表現したほうがより正確なもので、底部には溝状の遺構が検出されています。

池状遺構出土の銅製飾金具

上記のような形状